



支援センターだより

〒780-0972 高知市中万々78番地 高知ろう学校 相談支援部

電話088-823-1640 Fax088-823-1752

E-mail:k-ro@k.kochinet.ed.jp



令和6年度
第5号(3月14日)発行

暖かい春の日差しが感じられるようになりました。子どもたちはそれぞれの学校や園で、学年最後のまとめの日々を送っていることと思います。本校では、3月1日に高等部4名、3月14日に幼稚部1名、小学部1名の幼児児童生徒が新しいステージへの第一歩を踏み出しました。今年度修了、卒園、卒業する皆さんが、また新たな場所でいろいろなことを経験し、いろいろなことに挑戦して、より成長してくれることを願っています。

今年度最後の支援センター便りは本校の河野美知教頭の【言の葉(ことのは)】です。

【言の葉(ことのは)】

私が初めて高知ろう学校に赴任したのは26年前の春でした。それまで、知的障害、肢体不自由の特別支援学校に勤めた経験はありましたが、聴覚障害教育は初めて。そこに携わることに極度の緊張と不安を抱いての転勤で右も左も分からない状態でしたが、救ってくれたのは、諸先輩方と保護者の皆様、そして子ども達でした。

先輩方には、聴覚障害教育の1から教えていただきました。ちゃんと口形を見せる、黒板に向かったまま喋らない、マイクのチェックを忘れない、言葉の理解をきちんと確認する、言葉の使い方をきちんと正す、等々、本当に基礎から丁寧に教えていただきました。

当時の指導法は聴覚口話法を主としており、現在のように教職員のための校内手話検定もありませんでしたが、子ども達同士は手話や指文字、身振りを使って会話をしていました。私も子ども達に教えてもらって、授業では板書し、プリントを作り、絵や写真等の視覚支援を行い、手話や指文字、身振りを交えて説明しました。休み時間の会話の中でもそうでした。振り返ると、当時から様々な「言葉」がありましたが、特に私の専門教科は「国語」ですので、子ども達が暮らす日本の言葉、日本語の習得ということに強いプレッシャーを感じたものです。

「なぜ伝わらないのか?」「なぜ理解できないのか?」「なぜこのように解釈するのか?」…

毎日のように自問自答し、本を読み、周囲に相談し、学部・他学部の先輩方の授業も廊下から随分観させていただきました。そんなことを繰り返すうちにやっと気が付きました。聴覚障害教育の専門的な知識も含め、自分自身の中の言葉が乏しかったのです。伝え合うためには、まず相手を理解し、思いやり、きちんと分かるように伝えなくてははいけません。そして、相手の言葉を最後まで正確に受け止め、自分の言葉で解釈し、自分の考えを持って相手に返さなくてははいけません。その力が自分自身に足りなかったのです。子ども達に力が身に付くはずがありません。

それに気付いた時、目の前がぱっと明るくなったような気がしました。それからは周囲の仲間と共に、子ども達と共に一人一人の言葉を探求していくことが楽しくて、あっという間の8年間でした。

「さあ、これからだ!」…と思ったら異動となりました。

あの頃は本当にショックでした。

けれども、高知ろう学校で学んだ8年間は、新たな学校の子供達との言葉を紡ぐための土台となったと確信しています。



裏面へ

昨年度、15年ぶりにろう学校に帰ってきたのですが、その発展ぶりに驚きました。特に人工内耳、補聴器の進歩、ICTの充実には、目を見張るものがありました。当初、人工内耳を装着した生徒に手話で話しかけると「自分は手話は分かりません」と言われ、私自身の口形と発声、発音をより意識して話したことを思い出します。「そうか、ろう学校はどんどん進化し、増々言葉も広がってきているんだなあ」と思ったことでした。

子どもの数だけ言葉があります。人工内耳の子ども達が自分と同じように聞こえるとは限りません。手話や指文字だけでは伝えきれないこともあります。発語や文字がなくても、表情や声、絵や形を言葉として伝え合える子どももいます。言葉は子どもの数だけあるのです。

「自分は手話は分かりません」と言っていた生徒が、卒業の際に、これまで苦手としていた手話と指文字を練習し、皆の前で発表する場面がありました。声だけでは届かない友達に、自分の思いを伝えたのです。大切なのは、互いに相手を理解し、思いやり、伝え合おうとする気持ちと、行動だと思うのです。そのために必要な一人一人の「言葉」を見つけ、使い方を確立し、その言葉によって心を育み、社会に送り出すことが学校の役割の一つです。



最近、校長先生との会話を通して、「こやらい」という言葉がにわかに浮上しました。中国・四国地方の方言だそうです。高知生まれ高知育ちの私は、物心ついたときから聞き慣れた言葉でしたが、実は成人するまでずっと「こあらい」だと思っていたのです。子どもの頃、近所のおばちゃん達が「まだまだ こや(あ)らいの最中やあきよ」とか「やっと こや(あ)らい が終わった」などと楽しそうに話しているのを幾度と聞くことで、この言葉を「子育て」という意味だと解釈しました。そして「子どもをお風呂で洗って慈しむ」というイメージと重ね合わせて、私の中でいっそう「こあらい」という言葉が定着したのです。その間違いを友人に正されたのは恥ずかしながら大学卒業後のことでした。その時、「なぜ『こあらい』ではなく、『こやらい』なのか」という疑問はありましたが、単なる訛りだと勝手に決めつけ、それ以上掘り下げようとする気持ちがなかったことが我ながら残念です。

ところが、宮崎県出身の校長先生は、そこに大きな疑問を抱き、更に謎を解明すべく行動しようと立ち上がったのです。そうすると、私も動かないわけにはいきません。早速調べたところ、「こやらい」の「やらい」→「やろう」とは、追い払うという意味があり、元々「子やらい」とは、親や大人が子どもの背中を押して地域や社会に送り出すという、自立心の育成を重視した子育てを表した言葉だということが分かりました。

言葉は使っているうちに変化し、発展し、別の意味として馴染んでいく場合もあります。しかし、本来の意味合いを知っているかないかで、使う人の意識や行動も変わってくるのではないのでしょうか。「なるほど、そういう意味だったのか」と気付くことで、自分自身も少し大きくなれたような気がしますよね。

聞き違い、勝手に解釈し、間違って使い続け、友人に指摘され、校長先生の探求・探究心に引っ張られ、背中を押されることで、随分遠回りではありましたが、「子やらい」という言葉の持つ意味の深さを知ることができました。

子ども達が社会に出て、社会と交わり、個々の人生を豊かに楽しむための土台作りのために、私達教育者自身が興味関心を広げ、探求心を持ち、「なぜ？」を投げかけ、子ども達が自分の言葉で探究できるように、後ろからそっと押してあげる、という姿勢が大切だと私は思います。

子ども達一人一人が、大きく胸を張って翼を広げ、社会に羽ばたいていく日まで、心を込めて「子やらい」に励みましょう。

